

益田市市長
山本浩章

7月23日は「市民防災の日」です。言うまでもなく、益田市にとって未曾有の大災害だった「昭和58年7月豪雨非常災害」の発生の日にちなむものです。

この年の梅雨末期、山陰西部一帯を集中豪雨が襲いました。益田市内においては、7月22日夜から23日朝までの12時間に44.8ミリ、特に23日の朝6時から7時にかけては時間雨量93ミリという猛烈な雨となりました。これにより、益田川が氾濫し、市内中心部の広い範囲が水浸しとなりました。また、山崩れや崖崩れが多発し、麓の集落に大量の土砂が押し寄せました。

被害は甚大でした。益田市内に限っても、死者・行方不明者40名、住家の全半壊1873戸、被災総額は841億円にのぼりました。これまで度々水害に見舞われてきたこの地域においても、記録に残るものとし

ては過去最大の惨事となりました。

その後の益田市および島根県は復旧に全力をあげる一方で、この災害を教訓として防災面の見直しを進めました。特に社会資本整備については、計画中だった益田川ダムの構造や規模を大幅に変更し、また同じく被害の大きかった三隅川の支流に矢原川ダムの建設を計画するなど、治水対策の強化を図りました。

「天災は忘れた頃にやってくる」という言葉がありますが、今や忘れの間もなくどこかに次の災害が訪れるという有り様です。また、近年の地球温暖化による気候変動は、経験則にもとづく「想定」が意味を失うかのような極端な気象現象をもたらしています。私たちにあって記憶に新しい平成25年夏の豪雨の直後、気象警報の新しい区分として加えられた「特別警報」が島根県内で初めて出されたのは、昨年のやはり7月のことでした。

自然の猛威に事欠かない日本列島の中では、この益田は比較的安全な地域とされますが、それでも絶対ということはありません。今後も消防本部や各地区の消防団、自主防災組織、NPO法人防災支援センターなどと連携し、防災に不断の努力を注ぎたいと思います。

益田市の歴史文化の特色（全7回）

第2回 匹見の落葉広葉樹林帯と縄文遺跡群

【問い合わせ先】

市文化財課 ☎31-0623



新槇原遺跡出土の石器

一般に西日本の植生は照葉樹林帯に分類されますが、標高の高い匹見には今も昔も落葉広葉樹林帯が広がっています。前者よりも後者の方が、ドングリ類など食用にできる木の実が豊富であり、それを求めて小動物が集まるなど縄文時代の人々にとって、匹見は生活しやすかったようです。

匹見の歴史は縄文時代より前の後期旧石器時代（およそ3万5千年前から1万2千年前まで）にさかのぼります。最古の遺跡は約2万年前の新槇原遺跡（道川）で、県内の同時代を代表する遺跡として、県の史跡に指定されています。続く縄文時代（およそ1万5千年前から2400年前まで）になると遺跡数が増加します。上ノ原、神田、ヨレ、イセ（匹見）、水田ノ



石ヶ坪遺跡出土の並木・阿高式土器

上、石ヶ坪、中ノ坪（紙祖）、蔵屋敷田、田中ノ尻、土家屋（道川）、アガリ、山崎、田屋ノ原（澄川）、沖ノ原、芝（広瀬）、広戸（石谷）など場所や性格、時期などバラエティに富んでおり、縄文時代の匹見の人々の生活の様子を知る上で、大変貴重な事例となっています。

それぞれに特徴的な配石遺構があったり、出土品には広島県冠山産安山岩のほか、大分県姫島産黒曜石で作られた石器（イセ・ヨレ遺跡など）、新潟県糸魚川産の翡翠製柰玉（水田ノ上A遺跡）、九州系の並木・阿高式土器（石ヶ坪遺跡）など、広い地域との交流をうかがわせるものがあつたり、その見どころは多く、匹見を「西日本の縄文銀座」などと呼ぶ人もいます。